

艶色

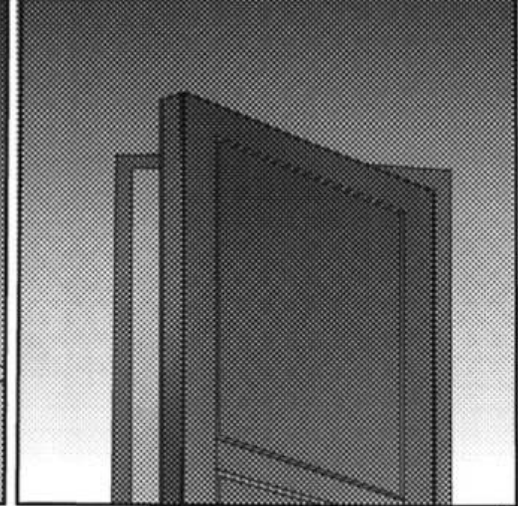
工月斯
衛

成人向



豊色
斯月II
衛

艶色 エンシ
斯月工 クノエ
衛 ヱ



私……
また……私は
……こんなコトを



ククク……
これで君と身体を
重ねたのは
何回目になるかな

最初はあれだけ
拒絶していたと
いうのに……

いまや自らソレを挟み
啜えているのだから
わからんものだよ

じ……
コマ……

中佐の
命令で……

ほお……

そうだった
かね？

ム……
ん……
ッ……





相変わらず
スゴい
ニオイ……

はあ

でも……今日は
これで……

んやあッ

ぬふッ



そ……
そこはあッ

クックック

さっきはココを
少し弄っただけで
随分と喜んでいた
じゃないか

な……



ほおらッ

ぬふッ

あんなに……

フフ

やはりな……



そんな……
お尻……なんてッ

気持ち悪い
だけですッ



こちらも
素晴らしい反応だ

流石 日本人は
こちらの才能も
あるようだ



でも……
こんなの……ッ



いいかね
コレは命令だ

今日から一週間
常に身に付けて
いたまえ



まずは割けない
ように軟膏も塗ってな

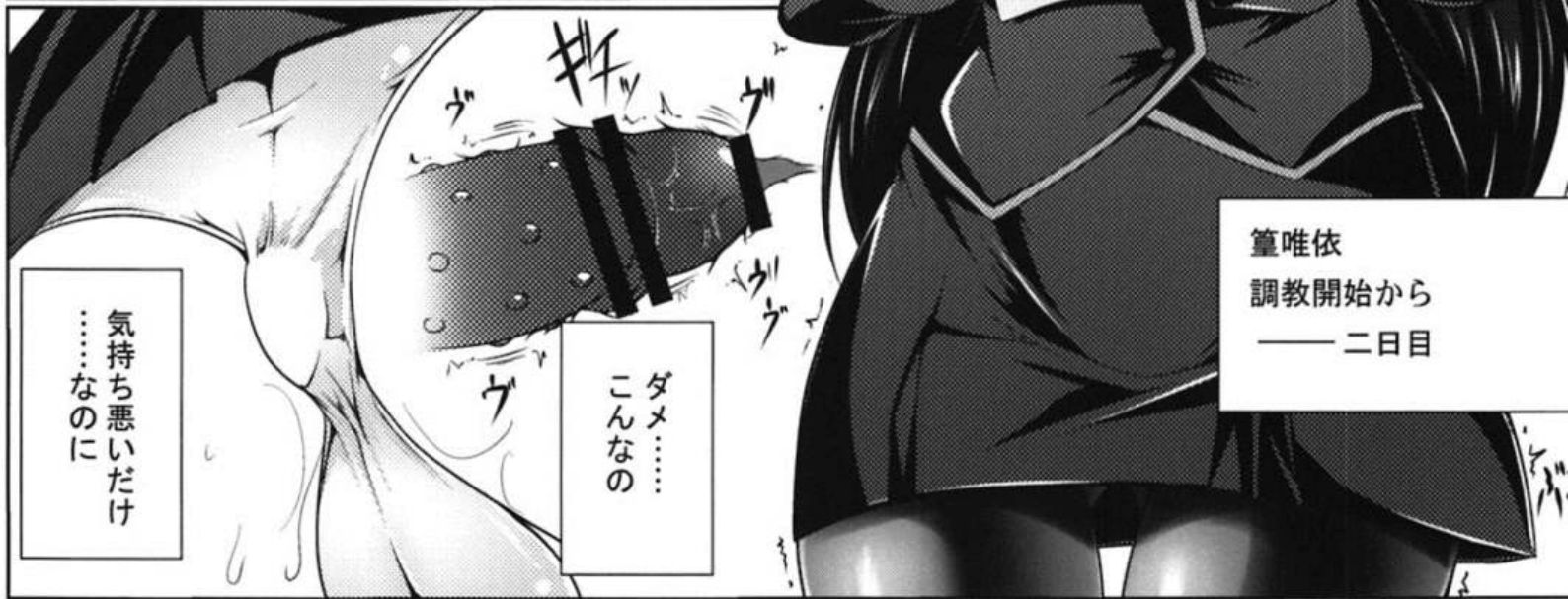
本当にそうかな？
暫くコレを付けて
過ごしてみたまえ



「……」
「……」

ふじ……
より効率……的な
……運用が……

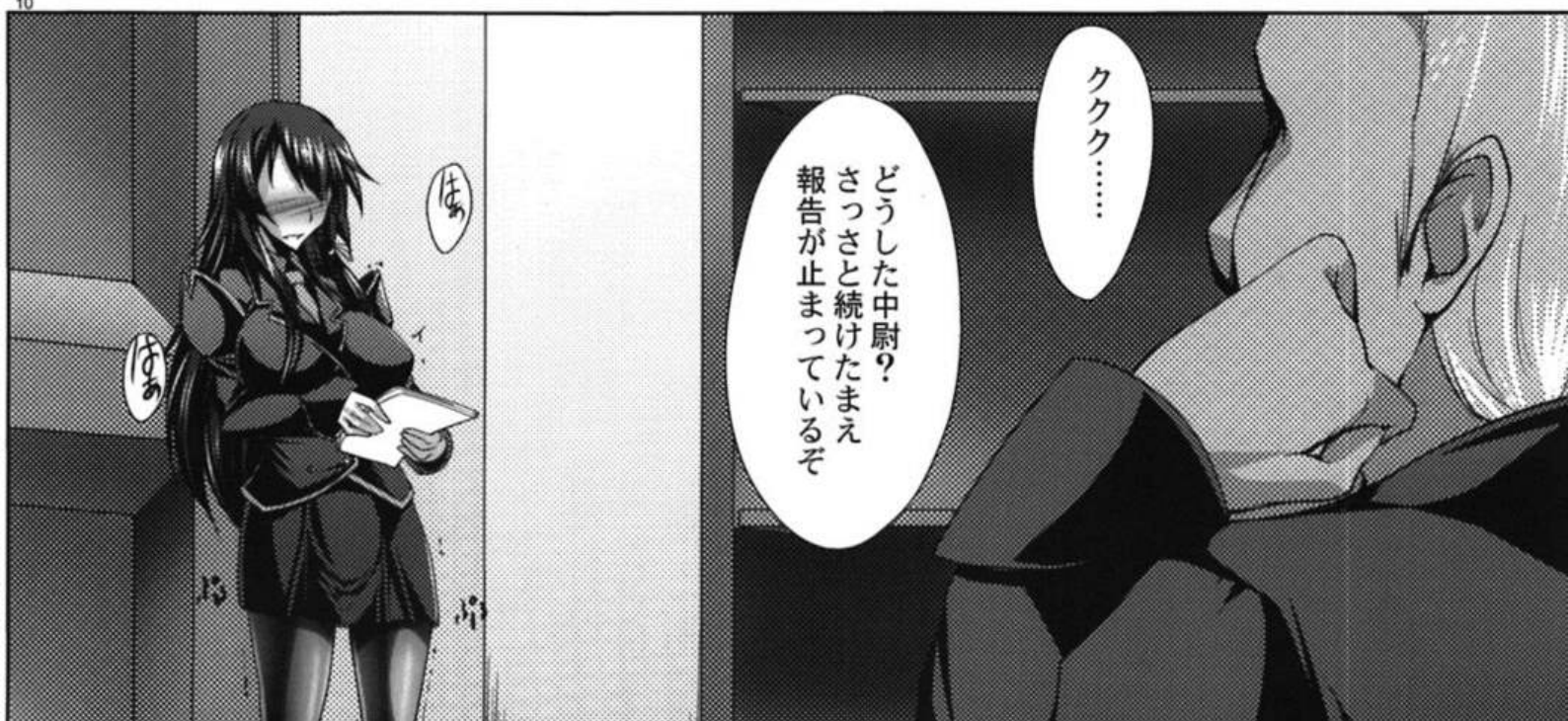
かの……かの……
「……」
くひ……



篁唯依
調教開始から
——二日目

ダメ……
こんなの

気持ち悪いだけ
……なのに



ククク……

どうした中尉？
さっさと続けたまえ
報告が止まっているぞ

はあ
はあ



シヤンと
したまえ!

しかし
軍人たる者……



それとも
具合が悪いのかね

息が荒いぞ?



こんな……
お尻でイっちゃう
……なんて……え



あー



あー

アレから
また二日
——

篁唯依
調教開始から
—— 四日目

今日は下着を
着けずに訓練を
するよう命じられた

勿論
——

あの器具は
挿入れたままで——

ダメ……
これ以上
走るなんて……



お尻も乳首も
こんなに
なっっちゃってるう

乳首……
コスれて……

無理……

ダメ……こんな
……所で……ッ



少尉が
居る……の♡

中尉……
どうした？



問題……
な……い♡
ちゅ……
中尉……？

だっ
大丈夫……ッ

なんとも
……ッ

でも……
こんなのお

こんな……モノに
絶対……屈したり
……し……ない

……ッ
私……はあ



ダメえ♥
こんなのじゃ……
腸奥まで挿入れても
……おお♥

きつと……
太くて硬いの
腸奥まで……え



ククッ
そろそろ頃合か



こんなの……
じゃ……
全……然
足りない
……ッッ

やはり
素晴らしいな

あ、

本当に……

この格好で
するのでしょうか

全く……
立っているだけで
男を惑わせる

メスのニオイ
をプンプンさせて
いるじゃあないか

なあ？

そんな事……

さて
約束の一週間だ
流石に辛かろう





肛門もぶつくりと
めくれ上がって……
腸液が止め処なく
溢れているよ？

二本を軽く
飲み込んで
しまったぞ？



おチンポ挿入れて
くださいいッ

おっと……すまない
そういうえは君は
尻穴など気持ち悪いと
言っていたね

肛門せつなくて玩具じゃ
満ちてきかないんであッ

捧げますッ
お尻の処女も
全て捧げますッ

卑しい雌斯衛の
肉穴全て
捧げますからあ♡



や……だあ♥

熱くて
カタイのが……

腸奥……
までえ♥

すんなりと
奥まで挿入ったぞ？

肛門をこんなに
拡げて恥ずかしく
ないのかね？

まおおお♥

あみま
ひええん♥

おひりあごっ♡
いいんねあうう♡

やあん♡

音……
吐きげさ……♡



精液専用の
肛門斯衛便姫に♡

しゅん
しゅん
しゅん
しゅん
しゅん
♡



い

ゆ、っ



まだ休むには
早いぞ



はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

はっ

おいおい



いい娘だ

フッフ



はっ



あはっ

はっ



—アルゴス1より CPP! ...どうした? 応答してくれ

—こちら アルゴス1

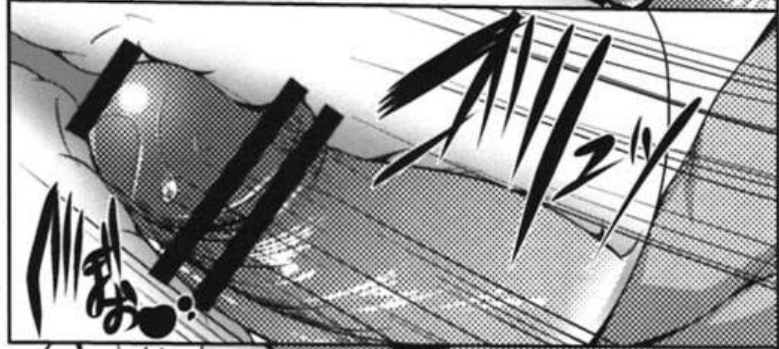
ホラ 指示を出して やりたまえ 困っているじゃあないか

あくっ



無印のけきんを
おねね……♡

こんな
状態で……



—おい
どうしたんだ？

—応答してくれ
……中斷ッ

射^だ精すぞおッ



はあ……う♥
大文……夫

少し体調が
優れないだけ……
問題……ない♥



——おいッ
大丈夫か
唯依
唯依
唯依ッッ



To Be Continued...?

次ページよりゲストの黒色彗星帝国さんの
短編小説になります。
挿絵も入ってますので
是非是非お楽しみください。
それではまた、あとがきで。

艶色
其斯月工
衛

エ
ン
コ
ウ
ユ
ノ
エ

戦術機に乗っている際の昂揚感、そして降りた直後に生じる独特の火照りのようなものには、今もまだ慣れない。

ブルリと肩を震わせ、前髪の前から汗の雫を滴らせながら、ステラはほうつと小さく息を吐いて新しい愛機を見上げた。F-15ACTV・通称アクティヴ・イーグル。長らく乗り続けてきたF-15Eと比べ、あらゆる性能が格段に向上しているそれを、ステラは早くもモノにしつつあった。

自分で乗ってみて、改めて良い機体だと思う。ヴァレリオやタリサが気に入るはずだ。もつとも、そのタリサも今は不知火式型の慣熟のために日夜奮闘しておりそちらに余念がない。

「ん……っ」

まだ熱い機体脚部に触れ、アクティヴの機動力、瞬間の加速を思い出して身震いしながら、ステラは紅潮する頬を微かに弛めた。演習だからこそむしろ叩き出せる速度。開発衛士のみが味わえる恍惚と、実戦のヒリつくような緊張感とを頭の中で比べ嘆息しながら、もどかしげに身を振る。

周囲に木霊する整備兵達の怒号の中、たった一つの音を探して耳を澄ませ、肌寒い風が吹いているはずのハンガー内で上気した身体を持て余しながら、ステラはようやく待ち人の足音が近付いてきたことに歓喜した。

「あ……ブ、ブレイメル……少尉……」

自分を見つけた彼の喉がゴクリと鳴るのが聞こえたのと同時に、ステラは上唇を艶めかしく一舐めした。

それは、ある種の儀式めいたものだ。

「ンツ、ちゅつ、……ふぶ、はむ……ん、ちゅば、ふ、あああ……っ」
「ふむう、う、うう！ はあ、んぶつ、じゅる、ん、むうう！」

現在は使用されていないハンガーの一角で。二つの影が重なり、食い合う。絡み合う舌と舌、互いの口内粘膜の感触、味、熱、匂い。

それらはどこまでも人間の、生身の肉々しさに充ち満ちていて、つい先程まで戦術機という鋼鉄の軀で暴れ回っていたステラ・ブレイメルを元の肉体へと還元し、再構築してくれるかのように。心臓は高鳴り、下腹は激しく疼いて、心は原始の胎動へと近付いていく。戦術機から人間へと戻る過程で、肉の昂ぶりを解放し、一匹の雌になる。

「はむ、ンツ、あ、んふううっ♥ んぶ、はああ」

「ふう、ふう……ブレイメル、少尉……」

年若い整備兵の泣きそうな顔。自分という雌に溺れている貌を見つめて恍惚と微笑みながら、ステラはさらに深く口付けを交わし続けた。

「ん、ぢゅぶ、ふう、……んっ、あっ♥ ……うンツ、は、はあ……じゅる、ふうっ、ピチュツ……ふ、ふあ、ああ……んうううっ♥」

全てを味わい尽くさんとするかのような勢いで舌を動かしながら、ステラはあどけなさの残る整備兵の童顔を見て目を細めた。

彼とこのような関係に陥つてから、果たして何度口付けを交わしただろう。そんな間柄だというのは、ステラは彼の名前すら知らなかった。彼がどんなに名乗ろうとしても、いつもやんわりと拒否し続けていた。

自分のような“悪い女”に引かかってしまった彼への、ステラなりの優しさだ。別にステラは彼を愛しているわけではないし、彼と正式に交際するなりなどまったく考えてはいない。ヴァレリオのような異性との付き合い方とも異なるこれは、例えば唯依あたりには知られたらどんな顔をされるか……想像しただけで苦笑いが浮かんでくる。

ステラ自身、この性情についてはよく理解していない。

単純な性欲の解消とも、また異なるのだ。確かに性欲はあるし、彼との行為から快感を得るもするが、それだけでは無い気がする。だから、ステラはこれを儀式のようなものと定義づけていた。一流のスポーツ選手が試合に臨む際に集中力を高めるため独自に行うらしいものと似ているかも知れない。ステラの場合、それが試合前ではなく、試合後に必要になるということだった。“超えた”ところから“還る”ために。

「少尉、少尉……っ」

「はあ……フ、フフ。どうしたの？ がっついちゃって。好き、だからいいけど……こうい

う、情熱たつぷりのキス」

「そ、それはその……ひ、久しぶりだったので……」

久しぶり、と言われてステラは記憶を辿ってみたが、さて前回は何日前だったろうか。考え込むこと数秒、ようやく思い出し出してみると、

「久しぶりって、たった五日じゃない」

クスリ、と笑みが漏れた。

「五日でも、充分久しぶりです……！ その、自分は……、出来ることなら毎日だって少尉と——」

言いかけた口を指先で遮り、ステラは少し困ったように眉を寄せた。

「ダメよ。それは、そういうのとは……違うんだから」

「……はい。すいません」

しよんぼりと肩を落として項垂れる彼から向けられる好意はくすぐたいが、それだけだった。ステラは彼を愛することはないだろうし、彼も今はただ熱病に浮かされたように年上の女への感情を持って余しているだけで、遠くない未来それが恋でも愛でもないことに気付くはずだ。気付かなければ、いけないのだ。

「でも、そうね。久しぶりだって言うなら……」

「あつ！」

「その分、愉しみましよう？ ……ん、……熱っ」

気を取り直し、ステラは彼の口を遮った右手を今度は股間の方へ伸ばすと、既に硬く凝っているそこをズボンの上からゆつくり丹念に撫で回した。

「すごい、元気……確かにこれなら、たった五日でも久しぶりって言いたくなるのもわかる、かも……ふ、うう……ソツ、ふう」

「あう、ああつ、……少尉……あつ、ああ……っ！」

強化服とズボンと下着と。幾重にも遮るものがあるはずなのに、彼のソコは熱も硬さも脈動も、猛々しい雄をこれでもかとステラの手に伝えてきた。

撫で回す手に力が籠もり、指先が痺れるように敏感になる。

「すごい……コレ、熱いのが……ピクン、ピクンッて……あ、ふ、ああ♥ 暴れてるわ、あなたの……凄く元気に、ペニス……ん、おちんちん……ほら、……ほらあ……はあ、ああ♥ ……ん、はう、あああつ♥」

「激しっ、少尉……激しい、です……そ、そんな、扱かれたら……あつ、く、ぐあああああつ、しよ……あああ、スツ、ステラさん！」

階級ではなく名前を叫びながら思わず引けそうになっている彼の腰へ、ステラは手早く左腕を巻きつけた。さらに脚を絡ませ、ピタリと密着しながら僅かな隙間で右手だけを激しく動かし続ける。

「凄いい、凄いい……もう、爆発しそうに……なってる、わ。コレ……ピンピンになった……おちんちんが……」

擦り、扱っているだけで自分も意識が陶然としていくことに、ステラは躊躇わなかった。戦術機に乗った後の昂揚感がそのまま性感へと繋がりが、こうして身も心も昂ぶっていく感覚がたまらなく心地良い。演習を終えたばかりの自分も、つい先程まで整備作業をしていた所を抜け出してきた彼も双方共に汗だくで、その甘酸っぱい香りが、雄と雌の臭気が、ステラを酔いしれさせた。

「ステラさんっ、き、キツイですっ……あつ、ぐうう！ じ、自分の……もうパンパンで……あ、ぐ……！」

「そう、そうね……パンパン、だわ。こんなに雄々しく、イヤらしく……勃起して……んはああ♥ 今、脱がせてあげる……君のおちんちん……限界まで勃起したおチンポ、取り出してあげる……から……ああ♥」

喘ぎながら、ステラは整備兵の下着の中に手を突っ込むと、直接陰茎を握り締めた。浮き出た血管が激しく脈打ち、指先と手の平から伝わる感覚だけで達してしまいそうになるのをかろうじて堪える。

（ああ……きつと、五日間ずっと私を待っていたのね。……オナニーなんてしないで、ずっと私のことを妄想しながら我慢して、そうして溜め込んだものが……こんな、沸騰して、溢れそうになってる……）

「うあつ、ス、ステラさんうあいいい！」

「……ふ、はああん♥」

我慢汁を手に染み込ませながら、ステラはツナギのズボンと勢いよく下着をズリ下ろしてやると、雄々しく反り返った肉棒を露わにさせた。

やや包茎気味ながらも、年齢や体格に反して素晴らしく立派な肉棒。パクパクと開閉を繰り返しながらジツトリと先汁を滲ませている鈴口を見つめていると、ステラは目

眩がするかのようだった。

「ああ……出たわね、五日ぶりの……フ、フフ……エッチな、おチンポ……♥」

「あ、うううう……は、はい……五日間、我慢してました……！ ステラさんの、ステラさんに扱いてもらいたくて……しゃぶってもらいたくて……ステラさんのイヤらしいお尻の穴にプチ込みたくて、ずつと我慢してましたッ」

正直な告白に、ステラはご褒美とばかりにカリ首を指先でなぞった。

弱々しく、もどかしく、甘く、辛いであろう刺激。女のステラには正確に理解するとは不可能でも、これまでの経験から彼がどの程度の刺激でどのくらい感じてくれるのかはわかる。

唇がうつつすらと開かれ、白い歯が覗かせながら、ステラは右手の人差し指だけで肉棒を撫で回し、翻弄した。

「ああっ、ス、……ステラ、さん……！」

「ビクビクして震えているわよ？ ほら、おチンポ……わかるでしょう？ 私の指で、クリクリつてされて……クスッ♥ 可愛い……こんな凶悪な外見なのに、こんなに太くて熱くて硬いの……」

うっとりとききながら、その場へと屈み込む。

膝立ちになり、丁度胸の高さへ肉棒がくるように。

「あら、また跳ねたわ」

「うっ、あうう……」

「そんなに楽しみなの？」

これから何をされるのか、期待に打ち震える剛直はビクビクと痙攣を繰り返しながら臍まで反り返っていた。その見事に惚れ惚れとしながら、ステラは胸部の保護皮膜を破り、乳房を露出させた。

寒くはない。寒さなど感じないくらい、全身が火照りまくっている。

「楽しみはずよね。あなた、おっぱい大好きですもの。……五日間、私のこの胸に挟まれたくて仕方なかったんでしょ？」

囁きかけながら、ステラはツンと勃った乳首で亀頭を軽く突いた。

「~~~~~ッ!?」

「大きなおっぱいで、はち切れそうなくらい勃起したおチンポ挟まれて、抜かれて、皮ま

で剥かれて……キモチ良く、なりたかったんでしょ？」

ブンブンと臍面もなく首を縦に振る彼の可愛らしさに、ステラは子宮がキユンと疼くのを感じて下腹に手をあてた。

楽しみにしていたのは、自分も同じだ。鈴口から涙を流して震えている肉棒へと、乳房を近づけていく。彼のモノは大きい、それでもスッポリと包み込んでしまえるステラの爆乳が、亀頭へと触れる。

「はうっ、んあアアンツ♥」

陰唇を亀頭で擦られたかのような感覚に打ち震えながら、ステラはゆっくりと、乳房で形作られた谷間膺のナカへと剛直を咥え込んでいった。

「挿入って、くるわ……ああ♥ あなたの、遅いおチンポが……ギンギンに反り返ってる勃起チンポが、私の胸のナカに。おっぱいで出来たウアギナの、おっぱいマンコのナカに……おチンポ、ずぶ、ずぶ……はっ、ふあああっ♥」

「あぐっ、あああっ！ ステラさんの、ステラさんのおっぱい！ おっぱいのオマンコが、僕の、僕のチンポを、チンポを呑み込んで……！」

「はあ、はあ……ふいふいっ♥ ちんぽ、あああ……おちんぽお♥ 汁、ヌチャヌチャっておっぱいにくっついて……はあっ♥ イヤらしい音してるっ、おチンポのお汁と汗が、一緒に混ざって……五日間もしかして精液溜め込んでいただけじゃなくて洗ってもいなかったの？ 凄いいい……擦るたびに恥垢が、たっぷり出て……ふむっ、うううっ♥」

「ステラさっ、ステラさん！ つ、唾……、唾液も、垂らしてください……ヌルヌルに、おっぱいマンコ、もつとヌルヌルに、して……ああっ」

要求に応えるべく、ステラは小さく頷くとそのままクチュクチュと口を動かし、染み出した唾液を胸の谷間へと落とし込んだ。

カウパーと汗と唾液が混ざり合い、泡立ち、淫靡な粘着音をたてる。その光景はまさしく男性器と乳性器による性交そのものだ。

「はあ、はあ……ンツ♥ く、きふ、う……♥ おっぱいのナカで、おチンポお、また硬くなってるわ……んはああっ♥ キミのコレ、おチンポ、やっぱりスゴイ……どんどん、反り返って……おっぱいから飛び出ちやいそうよ……ああっ♥」

「い、やだ……まだっ、出たくなんでない……から！ ……ステラさんの、爆乳マンコに、もつと、もつとチンポ突っ込みたいです、から……う、あああ！」



「ああ、射精してる……射精てるわ♥ ビュルッ、ビュルッで下品な音をたてて、精液が私の胸の中で、射精チンポ跳ね回りながら……あつ♥ つ、強い……これ、なんて、勢いで……はっ、うく、きふうううつ♥ しや、射精しながら腰振って……あつ、ま、まだ……まだ射精するの？」

「だ、だって！ こんなんじや、こんなんじや全然収まらなくて……はっ、く、ああああ！
ま、また射精ます！ あ、あああああ！！」

「う、嘘、連続で……!? ——ふああああああああああつ♥」

精液を吐き出し続けながらの挿入から、さらにもう一度亀頭が膨らみ、盛大に爆ぜた。精液の爆発が乳房を内側から圧迫し、衝撃にステラの全身が震える。

「あつ、は、ああ……つ♥」

二度目の爆射でも肉棒は萎えることなく、パンパンにエラの張ったカリ首で乳肉を刮きながら若い整備兵は滾る欲望の全てを吐き出そうと腰を振り続けた。陰茎全体が敏感になりすぎて、もはや何がどうキモチ良いのかもわからない。なのに動きが止まらないのはそこにステラがいるからだ。ステラの爆乳性器がキツク剛直を締めあげ、雄汁を搾り握ろうとうねる限り抜け出すことはかなわないのだと彼はそう認識していた。

「あくつ、く、はあ……ステラさん！ ステラさんンッ！！」

「はふ、は、はっ♥ ……たくさん、射精たわね……なのに、まだ、全然萎えてないなんて。凄いわ……こんなに凄いわおちんぼ、そうそういないわよ？」

リップサーピスではなく、心底からそう述べてステラは乳房にこびり付いている精液を勿体なさそうに指で撫で回し、肌に擦り込んだ。どんなに濃厚でゼリーのようでもあくまで液体は液体、零れ、流れ落ちていってしまうのが勿体ない。吐き出された精液の一滴も残さず自分のモノにしたいという欲求に従いながら、ステラは口の周りに付着していた汁を舐めとった。

そうして、胸の前でビクビクとしまっている剛直を優しく撫でる。

「あうっ！」

「これほど射精したっていうのに、全然足りない、もつともつと射精したいって言うてるわ、この子。五日間、本当に辛くて待ち遠しかったのね。」めんなさい

「い、いえ……あ、あう、が……はあ、あ……っ！」

今度は手ではなく、また乳房で。

精液まみれでヌルヌルになった乳肉を亀頭に擦りつけ、ゆつくりと円を描くように挿ね回す。それだけで剛直は腫れ上がり、割れた尿道口からはまた新しい精液が滲み出し始めた。

「まるで底無しね。もうベニ汁が滲んで、ヌチャヌチャって……ンッ♥ これ、糸引いてるわ……おっぱいとおチンポが繋がってるみたいに。フ、フフ……もう一回、おっぱいで……ん、は、あああつ♥」

「くああつ！ ステラさつ、あ、あああああ！」

「はっ、ひやうつ♥ ふつ、あつ、あーっ♥」

今度は挟むのではなく乳房をグツと亀頭に押し当てて、剛直が柔肉に沈み込む感触を堪能しステラは短く悲鳴をあげた。

濃厚な雄の体液が肌に染み込み、ステラの中の雌が花開いていく。戦術歩行戦闘機という機械の軀体から切り離され、解放されて、今やステラは完全に生身の女へと還元を果たしていた。

その雌肉が、猛る雄肉を包み込み、三度爆発させる。

「あ、あああつ！！ イツ、イクツ！ またステラさんのおっぱいの中に、あが、あああああ、でっ射精るううう！！」

「くくくくッ♥ はっ、あ、ああああああつ♥ 射精てるわ、全然、量も濃さも変わらないまま、精液また、ドビュッ、ドビュッ……おちんちんが胸の中で跳ね回って、ギンギンにしながら、暴れているわ……ふ、ああ♥」

三度目にしてまったく勢いの衰えない射精を全身で感じとりながら、ステラは片手で乳房を、もう片手で下腹部を強く押さえ付けていた。

子宮が狂おしく疼いている。

キョと泣きながら、雌が本当に雌たる部位の秘肉がざわめき、蠢いて、男根を欲していた。

彼もステラそこに挿入したがついている。もうずっと、関係を持ち始めた頃から入ることを望んで、拒否され続けている。

「……ス、ステラさん……っ」

強化服に包まれたままの股間を凝視しながら、今日こそは、今日だけはと言外に訴えかけてくる彼に対して首を縦に振りそうになるのをステラは堪えた。



と駆け昇ってくるのを感じとりながら、ステラは抑圧していたものを全て解き放ち、欲望のままにアクメを迎えた。

「あつ、あーっ♥ はあ、ンツ、あヒツ、いいいんおおお〜っ♥」

めくるめく悦楽に全身は絶え間なく痙攣し、直腸では射精された大量の精液がジワジワと内壁に染み込んでいく。

「はっぐ、ふ、ふう……ステラさ、んっ、あ、ああつ！」

「〜っ!? ま、また……やつ、んあああつ♥」

いったいどれだけ射精すれば気が済むのか。底無しのように熱い子種を吐き出し続ける整備兵に感心すると同時にやや呆れつつも、ステラは悦んでそれを受け入れた。最後の一滴を吐き出し終えるまで、何度も、何度も……



情事後の気怠い空気は嫌いではない。

「……はあ、……はあ」

「……ンツ♥ ……ふ、あ……ああ」

大量に注がれまくった精液が尻穴から零れ、太股を伝い落ちていく感触にピクリと睫毛を震わせながら、ステラは自分に抱きつくようにもたれ掛かっている整備兵の体温を感じて相手を綻ばせた。

息も絶え絶え、汗と汁にまみれ、全身から湯気を発している今の姿を誰かに見られるのはまずいのに、いつまでもこのままこうしていられたらいいのという誘惑に心が揺らぐ。

「はあ……、……うっ」

未練を払い、彼から離れたステラはまず全身に付着した夥しい量の体液を拭うためにウェットティッシュを取り出そうとした。

「あつ……ス、ステラさん……っ」

引き壊るように声をかけてきた彼の眼は捨てられた子犬のようで、いったい何を望ん

でいるのか読み取りつつもその気持ちに伝えるわけにはいかないステラは困ったようにフツと思を吐き、軽く唇で唇を塞いだ。

「……また、今度ね」

その言葉は果たして彼にとつてのよすがなのか、それともステラにとつてのものなのか。わざわざ深く考える必要は無いだろう。

頬を赤らめ、ポーッとしている童顔へと微笑みかけながら、ステラはなんとも悪い女に引つかけてしまったこの若い整備兵の身の上に同情を禁じ得なかった。

〈END〉

あとがき

はじめましての方ははじめまして。そうでない方、こんにちは。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

TEもアニメ化が決まり、不安一杯胸いっぱい、それでも

やっぱり気になっちゃうって感じです。

アニメの唯依姫がどうなってるやら、って感じで。

ゲームの方も同時期にリリースされるのかなあ、なんて思いつつ、

早く発売してくれればなあと思っております。

それではまた、別の本でお会いしましょう。さようなら。

奥付

誌名	: 艶肛斯衛
発行者	: 寒天
発行サークル	: 寒天示現流
発行日	: 2011/8/30 第二版
印刷所	: ねこのしっぽ様
WEB	: http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/

※18歳未満の方の購入を硬く禁じます。

2011.8.13

寒天示現流